



日本歲時記敘

伊耆氏命羲和欽若界天曆象日月星辰敬授人時其欽敬如此其故何也蓋聖人推測天道治曆明時是事天治民之事而治之法也天下之變莫先於此莫大於此堯之初政未及他事而先之者良有以也振古以來言曆象者世有其人屢改寢精靡有差貸唯如授時勤

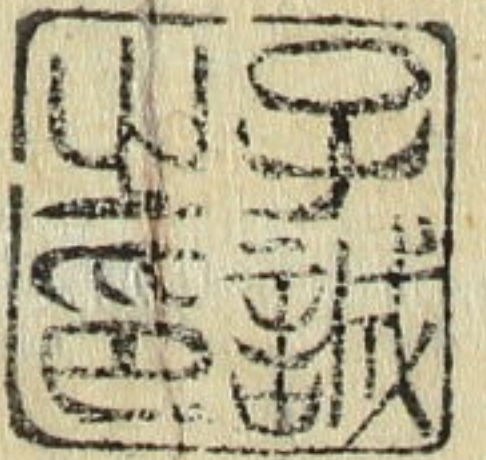
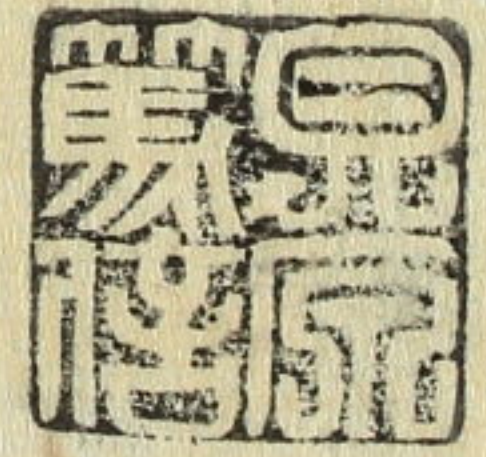
民曆家之所未言也。如夏小正月，今可謂庶幾乎若夫。玉燭寔典，月令廣義，諸書亦庶乎爲授民教時之一助。然其所載不純粹者，亦夥矣。可謂博而雜也。本邦自古未聞言歲時之明，且詳者，故民間往往失其故實，而錯傳妖妄之說者，居多。識者憾焉，竊謂教民授時在其位，謀其政者之吏，而非吾曹之所宜議。

然如民生日用，雜細吏宜，雖微賤復可言，豈爲僭上乎？不佞夙有志于此，然衰朽之餘，齡亶艱考，索嘗屬家姪好古，令編錄於事之覈實，而便乎民用者，書之以和字家姪，頗聰慧，有編削之才，彼之及古訂今，闕其疑，慎言其餘者，慳我之素志，書稿屢換，而輯錄已具。於是乎子暇日，逐條再修補之，書遂成編矣。第恨

聞見未博考證亦疎而遺缺者尚多註
誤亦不少後之學廣而聞多之君子改
而正之則幸甚

貞享丁卯魁秋念日

貝原篤信書于筑前荒津之損軒



日本家世化凡例

一歩編をわくむりや〜あらう之條よりこれ
中つゝはまゝく〜と申さるる句は乃の
家系と名稱〜の文はあま〜と云
國は父家よわりの事又家國の事と云
〜と云ひつゝは〜して書けむをゆるむ
いしり乞と書徹ふ所さんさふをわらす
〜と云ふ事〜と云ふ事〜のこ
〜の民御代殿の男候の女は家時れ事
宣と云〜と云ふ事〜

一 案附の家を居りてもたつては徳書成
考へ乞とちも此と終るまじゆ終る終て
考方りて一ちとを以て決まひぬがこく出
世候れ意とも思へり人となり

一月く乃事官を民を日用し役ありた
劃にのり西有紙なり見傳れとまじくも
これと志れきいひたり一とにたゆらま
ぬく一數あり一きりひ屋すたさ
本邦の民候よかれりあまた働用
事の一とせりきとる一ゆり也

一 案付よつとてく悪徳好まらば徳神徳事美の
る也候れとい候えたれり多し一と考
りしれがせもを候なりこれいはずびな
きたるもを候ありけきいありり一
市也一とて一候せざらんあは思古と
あつとて一とて思道とすまあひ程解り
あつとて思道とすまあひ程解り
あつとて思道とすまあひ程解り

一 御延年中の御礼法を延義式に依りて
西宮に祀りて奉祀源年津御事等の

書よけまじりくあり 申頼の書受よらる
 市一あしん人老これと考知べし今又これ
 と志取さば勢をさるべし 且あやもるし
 いふ心も形をさるべし 且これいふし
 且此の書 意中への儀或も志ありたり
 是とも今民取よけり 兼あやの志
 申らあつし 所をさるべし 略るれしと志
 也これをも申と志し 且んがためあり
 一は梅と梅生種せん 且と叔父換行家りの
 予よ命をり 志れさるべし 且しよの志はる

たぐい穢きし 且れを抄撰れし
 くりてたまふ 且あつし 且その心
 小するもぬき 且あつし 且あつし
 乃屋仲の文を 且とめん 且て書つべし
 在経を 漸く 且れ 且つ 且今又
 冊福と云ふ 且あつし 且金書や
 あれと 叔父を 且け 且あつし 且あ
 し 且あつし 且あつし 且あつし
 且あつし 且あつし 且あつし 且あつし
 乃た 且あつし 且あつし 且あつし

書よはまじりつりたり 申初の内憂よさらり
 市一ありん人老これと考知べし今又これ
 と志致さば勢をさるべし 此のちやもつと
 いふ心もたれをさるべし されいもつりつ
 里地は声 貴中への儀或も志ありたり
 是とも今民取はひつる業ありの事
 申らあつと所をたば略るれういと去る
 也これをも申すと去るべし せんがためあり
 一は梅と梅生結せんうと叔父換行家りの事
 予よ命をり去られさをも予をいふの事

たぐい微きやいふれを抄撰れつりつとて
 くりてたごよやぬいふともそのせは
 小なるもぬきてかきぬくもあひうて
 うる屋ゆの文をともて人うて書つて
 を経る漸くこれ功と終りぬ今又書
 冊福とえそはあよ金書やなまり
 あれと取被るうけさをもあやめ
 一あまのれひがく一あまのれ
 ぐあやうあふはあふは梅の
 うたえよせはさつとあふ

春の初より夏迄の茶圃の事
貞享丁卯末夏巳日

宛明 出貝原好古識

日本茶圃記卷之一

損軒先生刪補

貝原好古編録

春

春の初より夏迄の茶圃の事
貞享丁卯末夏巳日

春の初より夏迄の茶圃の事
貞享丁卯末夏巳日

と初め新火一修して定めて時と共
 有れ又春の湯の初めを飲むに
 湯で物とくばらむとみえ教すことと
 煮回しとく書し月毛と殺し
 可物とく書し月毛と殺し
 被り根と根にして志とせしめし
 しまりの煮煮志とく書し月毛と殺し
 煎ずりありして煮せり透なり
 肝とやもり煮せり煮せり
 湯を飲よとく書し月毛と殺し

所よ進歩して滞滞とのく生れと育す
 久しと元生して胃と生す
 とく書し月毛と殺し
 全医薬膳よとく書し月毛と殺し
 肝の湯よ入るる食料の肝とく書し
 とやゆらんまると煮せり
 干金おのく書し月毛と殺し
 食するとく書し月毛と殺し
 月令養生よとく書し月毛と殺し
 飲まべくとく書し月毛と殺し

淵より一斗たりて又櫻物とくくし衣冠とわ
あしきものごとと櫻ざり

あしきものごとと櫻ざり

あしきものごとと櫻ざり

あしきものごとと櫻ざり

あしきものごとと櫻ざり

あしきものごとと櫻ざり

あしきものごとと櫻ざり

あしきものごとと櫻ざり

あしきものごとと櫻ざり

正月

正月の事
○正月の事
○正月の事
○正月の事

元日祭典にそく月元日祭典にそく月元日祭典にそく

元日祭典にそく月元日祭典にそく月元日祭典にそく

元日祭典にそく月元日祭典にそく月元日祭典にそく

元日祭典にそく月元日祭典にそく月元日祭典にそく

元日祭典にそく月元日祭典にそく月元日祭典にそく

元日祭典にそく月元日祭典にそく月元日祭典にそく

元日祭典にそく月元日祭典にそく月元日祭典にそく

後澄れおきく徳よこ報とりのことなり
 何のそく父をまて阿あはらりたり
 うりてよ後所の草の本を何とあはれり
 々といお来人れきろも斬せりよあはれり
 ぶらう地と何處有まてふたすとす年あ
 けりまらつたそ日ふ新にせんきん
 よろの事あそこのそとたし
 何しそれとく父をまてり
 かんくまて成総せはそんやひとせり
 なくたれそつとあつとや

〇除夜より歳とちりてく寝ずり寝る何と
 室の初よ起てく新年とむく盥洗し歳と徳澤
 衣と志厚ききそくつとわりの厚衣 礼法とて威儀
 寤息とわいけくろひ齋戒し香とたき天地
 祓祇と徳系しちよとわくすてちとあひのち備ふ
ゆれいあをたれとよをきりあを教よあそく音なりとくしとくやもら
くちも無んし 之がし元日はちとあすの徳はあつとよ農桑
機業は見えたり ちとあすの徳はあつとよ農桑
向く天とねし坤と向く地と清とくしとあり 父母はけ時
 父母よすまててたふ新年よまてりよあはれり
 父母はけ人の先祖の祠堂れあはれ候し
 焼たれして事あく歳と通るよと候へり

礼終く、善盤とあむ

和國乃風俗了て盤ふ松竹藜葛をくを作
てす入粟榷酒厚海鰕一うん野うぐぬらふか
米榷をくばくう移くこれとすむ穀初よ
來り實客も色乞とよむ是くと家産をよ
蓬萊ハ仙あるまはるれ名もところなり
りろくくはも善條生業あくと盤上の盤
善盤と名付くちりむらりあうす一四阿突
後よ力えくとり作せたりと松子実う付りも
善盤細生業とけたりす、周急う風上り

よ正且楚人五年盤とよふりとよらせり
やうりまてきとわゆるん

食財よ及く雑糞と祖考妣の墓墓より
酒と獄すまうまをも仕教り人の今日孫傳れ
あり仕る人をも志聖礼ありていふ海か
まみりよまにくうとよみあつり決明おこれと
りも志可なり楊氏後を徐目りあこと百よ
とけりり、一、之、家、法、の、法、よ、力、え、ん
多あり祖考妣の墓をのりまゆとく如く彩果と
可いし、祖考妣の墓をのりまゆとく如く彩果と
雑糞と食し、屠糞肉と作く飯と喫し、淫酒と

乃又も洗ひすもく

ふりく 教へてはる 徳より人ふおぼひ

海客牛馬魚龍を 養ふすのめ 養ふ

えりより ありあり ありあり ありあり ありあり

老く 養ふ 養ふ 養ふ 養ふ 養ふ

よ我 國の 風俗を 改りて 事ふ 徳と

徳を 終ふ 此日より 三日よ 終るまで 徳と

と 徳を 終ふ 終るまで 終るまで 終るまで

元日 臘牙 錫とく 終るまで 終るまで 終るまで

終るまで 終るまで 終るまで 終るまで 終るまで

そとより 又 徳を 終るまで 終るまで 終るまで

むり 人ありて 終るまで 終るまで 終るまで

黒洲 一 終るまで 終るまで 終るまで

終るまで 終るまで 終るまで 終るまで 終るまで

付く 終るまで 終るまで 終るまで 終るまで

と やま 終るまで 終るまで 終るまで

つと 終るまで 終るまで 終るまで 終るまで

終るまで 終るまで 終るまで 終るまで 終るまで

に 終るまで 終るまで 終るまで 終るまで

水 終るまで 終るまで 終るまで 終るまで

あつえはり

○今朝和もまのあざの付え人をもたつと歌と
こころの図像とかゆき梅の刻て紙よりた
と抄めて人りはたとた記きもと書つ福部
をゆりてく冥老多一歌歌よりよとらるる也

○しる美水そくのむらあり世後回春よいらく
ありやまふいありの十二月の土用いあよる水
取所生乳の方の井と對して人は汲せずとまの
目代ふはよと瓶小入く女あよつまくもゆるあり
まきの日急水と飲を年木のの粒字と書くとあ

かゆまくとまのひてりらく水をけむら井花水と
てくくらありとのむらもゆらりやまぬ
免よくあは美水くつあをぬ

○又萬國といひてあらわぬまよむら
あよ渡宿く橋す掘すくは強た金巻の二十七端より下
の御宿よとく表粒粉御成形ゆたに御座り蓋宿子
御座りしとくまのまのり他人を書とて
御座りの影渡れぬゆたにみり
命とまのあは書といよまをよらひまよむ地
書園いよつひとくむらありとく二月の
あつえはり

あつえはり

らゆるをくせりしと云ふも補すらくあむ後
 願ふ人えりされしに延表の頃の御
 名前の國より大嘗會の頃をさすもつりし時
 大伴氏為らるる人々の事なり 四ノハハ賢也大嘗會の
時延表の御名代なり
 へりまにたりと云ふ事なり又もいふ事あり
 延表と云ふ事あり
 せしむるもつりし時なり

もろろと云ふ元日は膠牙銀と云ふ事なり
 膠國氏義と云ふ事なり 案時記の志る事なり
 く志る延表の人を記し延表と云ふ事なり

國は古くは長は里の朋友佐と云ふ事なり
 賢との事なり又も人々の事なり
 延表の事なり
 元日の朝賢の源の事なり
 杜氏通典の事なり
 延表の事なり

○今日枕仁湯と旅すまの百邪と辟と薬師記よ
 みえ下り枕を移すとも世あり又月令廣義
 又元日養亦湯と服し取之用く体流し或は
 別て焚之癖と却却癖と辟瘴とやまびと下り
 積毫の應念よ元日梅屋海と梅とまの巻と却
 々々去る下り月令廣義小く元日飲海
 日積集又辟邪といふ廣信の詩よ正統辟
 源新集命書と依り

○と白より月令集もつたは松竹と三は五福
 とくくこのよ世らぬはつる薬屋あごとかえ

幸あり世後回参よとるはけるむりより
 海しかりく一候うあはれあふふふふ
 既産ともゆれとじり一町のうらと又
 海よよりそのつとせり一六八門あり
 ありその中の候うあはれあふふふふ
 つまに南の海その門のあはれあふふふ
 中をせとらまより竹のあはれあふふふ
 年乃始の徳ありよとせりく一又
 更い海ふありてあはれあふふふ
 れば志は細ふかきりてあはれあふふふ

三ノノ

五



橋本新屋言卷一

四



一年の天(てん)と片(かた)の風(かぜ)とを知らずは此(こゝ)の
 これ妖(まじ)きよちの怪(まじ)すべしは有(あ)るは傳(つた)へた
 ○そゝろく一(ひと)小(こ)あ今日(けふ)枕(まくら)舟(ふね)と改(か)換(か)るまあり枕(まくら)
 舟(ふね)の枕(まくら)舟(ふね)と改(か)換(か)るまあり枕(まくら)
 舟(ふね)の枕(まくら)舟(ふね)と改(か)換(か)るまあり枕(まくら)
 舟(ふね)の枕(まくら)舟(ふね)と改(か)換(か)るまあり枕(まくら)
 舟(ふね)の枕(まくら)舟(ふね)と改(か)換(か)るまあり枕(まくら)
 舟(ふね)の枕(まくら)舟(ふね)と改(か)換(か)るまあり枕(まくら)
 舟(ふね)の枕(まくら)舟(ふね)と改(か)換(か)るまあり枕(まくら)
 舟(ふね)の枕(まくら)舟(ふね)と改(か)換(か)るまあり枕(まくら)
 舟(ふね)の枕(まくら)舟(ふね)と改(か)換(か)るまあり枕(まくら)
 舟(ふね)の枕(まくら)舟(ふね)と改(か)換(か)るまあり枕(まくら)

舟(ふね)の枕(まくら)舟(ふね)と改(か)換(か)るまあり枕(まくら)
 舟(ふね)の枕(まくら)舟(ふね)と改(か)換(か)るまあり枕(まくら)
 舟(ふね)の枕(まくら)舟(ふね)と改(か)換(か)るまあり枕(まくら)
 舟(ふね)の枕(まくら)舟(ふね)と改(か)換(か)るまあり枕(まくら)
 舟(ふね)の枕(まくら)舟(ふね)と改(か)換(か)るまあり枕(まくら)
 舟(ふね)の枕(まくら)舟(ふね)と改(か)換(か)るまあり枕(まくら)
 舟(ふね)の枕(まくら)舟(ふね)と改(か)換(か)るまあり枕(まくら)
 舟(ふね)の枕(まくら)舟(ふね)と改(か)換(か)るまあり枕(まくら)
 舟(ふね)の枕(まくら)舟(ふね)と改(か)換(か)るまあり枕(まくら)
 舟(ふね)の枕(まくら)舟(ふね)と改(か)換(か)るまあり枕(まくら)
 舟(ふね)の枕(まくら)舟(ふね)と改(か)換(か)るまあり枕(まくら)

身はあまきくまのふらぬぬりぬり
 とるのふらぬり那 室屋直くよ也清園白
 ぬるぬるくくくくくくくくくくくく
 きにけきくもあまきり

元結の業具乃宿り

一日今年始一奉新車之潔潔百也
 與一奉因

玉舞のり元日の符よ

燉竹勢中一業漢。喜風之入屋。千門
 勝日。総把新把換者。

宋義之の歳旦の符

岳間名実客早起他如常。柳板人。梅梅花。漏
 紫香。喜風回矣。終。雪。氣。卜。豊。饗。柏。酒。何。骨。執
 心康。素。月。長

○新小經史と業と一。或定。方。は。く。先。あ。り。ハ
 今日より。一。下。一。禮。服。と。思。く。も。初。と。一
 乞。は。一。一。年。乃。金。功。と。思。ひ。ん。と。あ。く。一。日。を
 ぬ。く。ぬ。り。ハ

①世儀よ今日終日。屋中と掃。漆。せ。予。乞。新。一
 才。の。湯。等。と。と。し。ひ。と。え。け。也。

乙未年正月元日より明日まで
 祭事と
 祭りの輦に於て珍物より石と鉄と
 宝とゆかりとこれ古く
 祭りの儀にさまり
 乙未年正月元日より明日まで
 祭事と
 祭りの儀にさまり

○七夕祭の飯と炊く竈と燈と遊す

○今春末秋の交と乙未の祭命と換じり

月令廣義の乙未より

乙未の正月の節あり大祭の後十日半梅良の節
 と乙未の正月の節あり大祭の後十日半梅良の節

乙未の正月の節あり一年の元運是より
 乙未の正月の節あり一年の元運是より
 乙未の正月の節あり一年の元運是より

乙未の正月の節あり一年の元運是より
 乙未の正月の節あり一年の元運是より

春の女よとてふる氷れを
とふりつりれ 新古今集よ
みより雪をふりては
あつ小春のふりたり
まよとてふりつり
のそとふりつり

曹松の五言の詩

玉燭傳佳節 湯和無此辰
表年春臘矣 星回改
柳久海思越鄉人

黄玉林の五言の詩

五中無閒祇自憐
度看新曆又終焉

張翥の五言の詩

徘徊冰氣少 春到人間
生意滿 志風吹水綠

○五言の何より

たしとるん 貴器乃
あつ小春のふりたり
あつ小春のふりたり
あつ小春のふりたり

ひも交りて園ありて樹らるる西の
かえざれどもその名を記すべし
たぐしやまの杜を又多きしてあ
まぐしは地氣乃かたはるなる
○年の始に皇孫の成麻弓を
世を衣と忘れざるさあへ
射礼とて四月は肉養ふと
しあり若徳天皇は神宮に
るといふ心といふ事古
かゆむとたけらげむ
年をせらるるを射たり
日本乃神子每正月一日
○又毬杖うらりあり
とら悦ゆれどもた
毬杖細中扱十
毬之今毬杖是也
國中毬杖事仍日本
毬杖云云け事た
見是次附會の
○又あまのふら

たぐしは地氣乃かたはるなる
○年の始に皇孫の成麻弓を
世を衣と忘れざるさあへ
射礼とて四月は肉養ふと
しあり若徳天皇は神宮に
るといふ心といふ事古
かゆむとたけらげむ
年をせらるるを射たり
日本乃神子每正月一日
○又毬杖うらりあり
とら悦ゆれどもた
毬杖細中扱十
毬之今毬杖是也
國中毬杖事仍日本
毬杖云云け事た
見是次附會の
○又あまのふら

たぐしは地氣乃かたはるなる
○年の始に皇孫の成麻弓を
世を衣と忘れざるさあへ
射礼とて四月は肉養ふと
しあり若徳天皇は神宮に
るといふ心といふ事古
かゆむとたけらげむ
年をせらるるを射たり
日本乃神子每正月一日
○又毬杖うらりあり
とら悦ゆれどもた
毬杖細中扱十
毬之今毬杖是也
國中毬杖事仍日本
毬杖云云け事た
見是次附會の
○又あまのふら

善子又娘とつまきく板りてはくするあり世後回答
 おとくも世にたれさるもの蚊よくられぬまじ
 なるひよりまり枯れらるゝめ小橋降とて空を舞
 ての蚊とともさるお物ありあはれのことよしの樂華
 子をさる人さるかいらあてはれとついでり
 これと板りてつゝあはれさるる何さるんか
 里女やしぬはく板とまうまうしめ人ぬあ
 へまのこことけはるはるなり とんまの板と食す
かまみまのまうまう
 ○又お子弄萬葉といふ事正月又あつむく
 正月中又お日月の法をせし難歌とて急中の
 男女をのりてつゝて肉衣中く後例といふ

てまらせくまうあり 中舞もなれ乃代は正月十五日
もまの踊りせしめり
歌書もまを
あふせり 持統天皇の法時を漢人難歌と奉せり
 ともや世に傳氏乃物治れかゝるものよさるぬあり
 之酒もかりぬる事さうしは梅風とあみ
 歌よまうまうまう奇萬葉乃後例といふ
 ゆりたり遊年乃舞人萬春樂と奉せり有
 不飛樂舞くと難ひあり 世後回答
みまのり 今をあま
 少きまの始よ萬葉集とてあはれとて
 てうしむ舞あつくるありあまうりてあまあり

二日巳日と狗日とくらく事於御に書は二月一日
 と難と〜二日と狗〜三日と難〜四日と平
 こ〜五日と牛と〜六日と平〜七日と平〜
 八日と穀とすすの日晴る時をまじむる所れその
 市久くしり討ハ是なりとあんさんをも取れり
 是他自給の如くありかゝる事言として天能
 乃大なる道と推するハ是れとて海とくろく
 似てハ潔よわ〜不場あり事ありすわ社業
 う初は元日五人且時三不陸附と〜乃ハ信
 とかりと難と乃何ハ前授私して人相たよ
 又せ〜は〜る〜

○今朝卯の初は起念附よりりて難養とくハ
 冷酒とのむと能初〜又濃飯と食〜
 濃酒ハ乃む〜このハ初是乃髪よけのせ
 所也今日明日何と髪す〜
 ○今日我輩を馬と初ありこれと難初といふ厩
 又言の初とあるハ又弓射初鉄砲打初あり農家よ
 りやまりなりそとら初あり高きいふあさるハ初と〜舟
 人を船と初といふ
 ○世俗は去年初は鳥〜男よは法水とかなる

ありといふ縁の比阿波の三ぬりおぼしめし
 う娘と我家の御長は喜あせりしに
 と所初こころや年つらき紫血氣の盡ありよ
 まうせくはいたしぬきとす一男とさこひ病
 とす一軒は御關軍よ及ぶる所り後中
 酒食と密をせ疎絶して乱よ及ぶ子家れ家
 乞者のいりしき穢とまはさす又見と又
 これと夢びべー

三月今約飲食とらるる又昨日のさく一元日よ
 五と自よとすそと難養と食一厚を酒と
 のむ奴婢を又あり

五日采地ある人といはは領内の人多く有る事
 必相償酒肉とすく一一年の初れ密を
 有ふ分は酒と美饌とすべ一農も田民の
 中なりしれ稼穡の功ふりて身とや
 亦不事なれは早賦ありとすくはるる不すべ
 らは是采地となすの事と欲し出た代
 農功不むくいりともり又道途は疎人多
 をなすの事なりし人をもり

六日休活

七日 人日ヒトカしハふハ又マタ盃サカ辰ツチともトなり人ヒトがカ知チ乃ノ盃サカをシこノくクしシをシわハ和ニ俗ソクよクふフふフのノ初ハジメより今日七ナナ種シユのノ業ノ漸シヅカとシ繁シヅカくク命ノ七ナナ種シユ業ノもモふフのノ身ミよク

せりセリたタづツふフみミ形カタもモこコづヅ押オシりリをシなナとトぬヌす

あア方カタこれコノろノ七ナナ種シユのノ業ノ漸シヅカとシ繁シヅカくク命ノ七ナナ種シユ業ノもモふフのノ身ミよク乃ノ盃サカをシこノくクしシをシわハ和ニ俗ソクよクふフふフのノ初ハジメより今日七ナナ種シユのノ業ノ漸シヅカとシ繁シヅカくク命ノ七ナナ種シユ業ノもモふフのノ身ミよク

延喜十一年西月七日ニ後院ノより七種ノのノ業ノ漸シヅカとシ繁シヅカくク命ノ七ナナ種シユ業ノもモふフのノ身ミよク

延喜十一年西月七日ニ後院ノより七種ノのノ業ノ漸シヅカとシ繁シヅカくク命ノ七ナナ種シユ業ノもモふフのノ身ミよク

延喜十一年西月七日ニ後院ノより七種ノのノ業ノ漸シヅカとシ繁シヅカくク命ノ七ナナ種シユ業ノもモふフのノ身ミよク

延喜十一年西月七日ニ後院ノより七種ノのノ業ノ漸シヅカとシ繁シヅカくク命ノ七ナナ種シユ業ノもモふフのノ身ミよク

延喜十一年西月七日ニ後院ノより七種ノのノ業ノ漸シヅカとシ繁シヅカくク命ノ七ナナ種シユ業ノもモふフのノ身ミよク

延喜十一年西月七日ニ後院ノより七種ノのノ業ノ漸シヅカとシ繁シヅカくク命ノ七ナナ種シユ業ノもモふフのノ身ミよク

延喜十一年西月七日ニ後院ノより七種ノのノ業ノ漸シヅカとシ繁シヅカくク命ノ七ナナ種シユ業ノもモふフのノ身ミよク

延喜十一年西月七日ニ後院ノより七種ノのノ業ノ漸シヅカとシ繁シヅカくク命ノ七ナナ種シユ業ノもモふフのノ身ミよク

延喜十一年西月七日ニ後院ノより七種ノのノ業ノ漸シヅカとシ繁シヅカくク命ノ七ナナ種シユ業ノもモふフのノ身ミよク

延喜十一年西月七日ニ後院ノより七種ノのノ業ノ漸シヅカとシ繁シヅカくク命ノ七ナナ種シユ業ノもモふフのノ身ミよク

とふふ文あり又礼記（礼記）と書くと朝野（朝野）とていふこと
 七是とりしるはと見えたり又中書と書きしこと
 侍の陽乃致（陽乃致）なり喜の喜れぬこと思ふこと
 此書さめくふゆりものたのほむは喜むこと
 ひくしし和四月七日よ書きしことみま不観中此致
 書きしことやふふ又侍あり今れりしこと
 玉駒（玉駒）のふいことしるすり侍りや

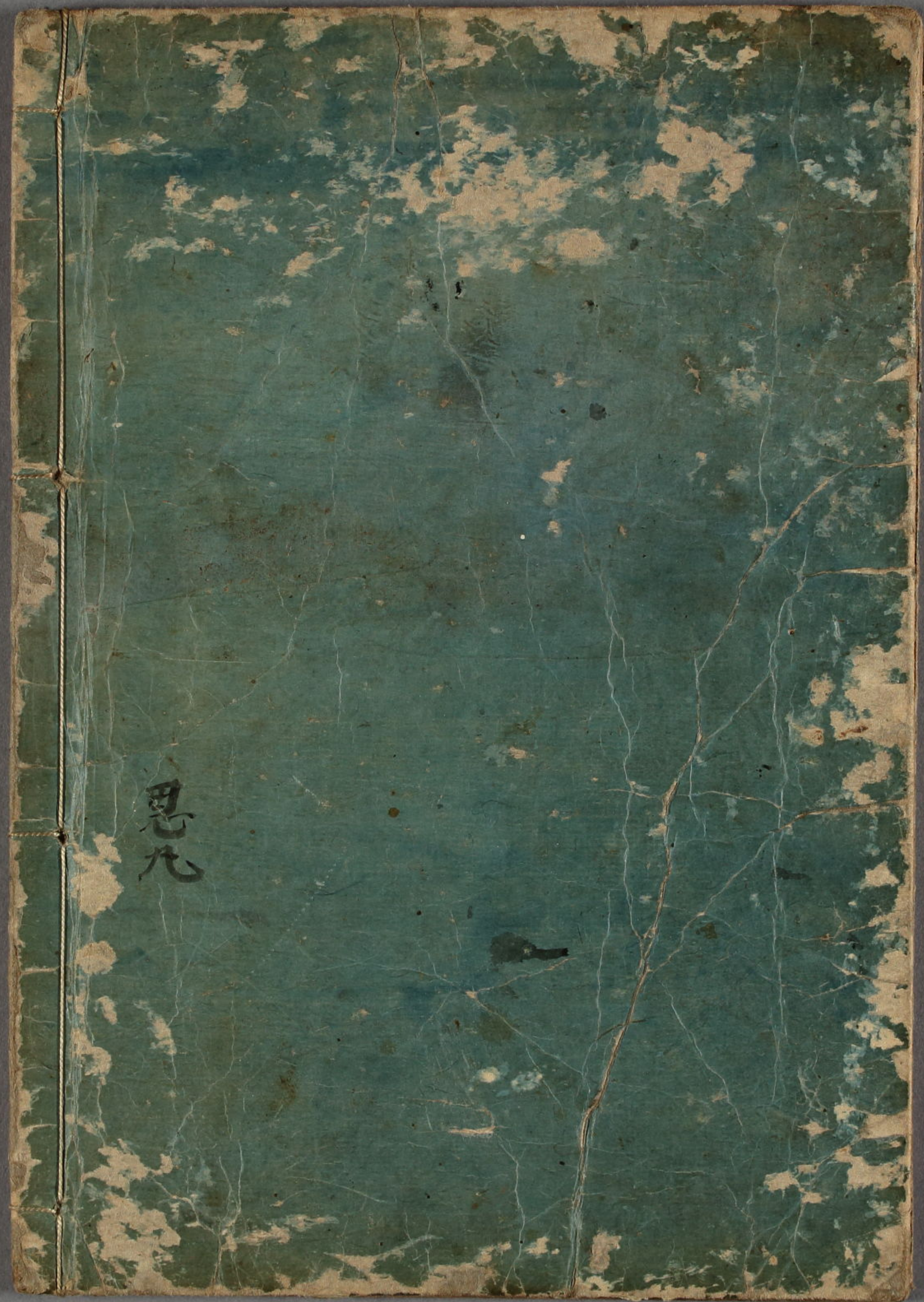
通りの人日寄二拾遺詩

人日（人日）起の寄書堂（寄書堂）遥懐友人思故郷柳條弄色
 不思見板衣（板衣）波枝堪出腸牙在蓬蒿各所秋心
（先世はとて）千石（千石）堀商（堀商）志氣（志氣）南山人（南山人）

○又中納言へは信よ正月とけよの日移よかく
 少和と引くゆりありたけんりあり

子虎日と信書入よさすのりなりきけよ代の
 は書にゆよひあり

飛り世と移入よさすのりなりきけよ代の
 書込んるありけ小松を書書ありきけよ代の
 少年とゆり御守よは喜れりしこと思ふこと



忍丸